慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	手稿「バスティアとケアリ」について：1850年代マルクスの古典派批判への一視角
Sub Title	On a Marx' manuskript in 1857 : "Bastiat and Carey"
Author	飯田, 裕康
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1978
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.71, No.5 (1978. 10) ,p.802(174)- 816(188)
JaLC DOI	10.14991/001.19781001-0174
Abstract	
Notes	遊部久蔵教授追悼特集号 論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19781001-0174

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

手稿「バスティアとケアリ」について

——1850年代マルクスの古典派批判への一視角——

飯田裕康

1 開　題

ロンドン時代のマルクス，とりわけ1850年代のマルクスが，1840年代，60年代，いわゆる「初期マルクス」と，「後期マルクス」との中間にあって，その生涯に独特な意義をもつこと，このことは，最近いまひとつの問題，晩年のマルクス，とともに，ようやくその全体像において注目されるにいたっている。(1) 1840年代末から50年代の初頭に，マルクスは，国際的労働運動や社会主義運動に中心的役割をはたすのであるが，ヨーロッパにおける革命の経緯は，ロンドンに亡命者として暮すマルクスの思惑を超えて展開し，それに対する新たな対応を余儀なくされていった。その対応は，一つには，ロンドンのインターナショナル内部の人的関係の複雑な角逐によるもの(2)——すなわち，ここでマルクスは，自らの思想の展開とはかかわりのない「マルクス主義」と直面する——であり，二つには，ヨーロッパにおけるブルジョアジーの革命的空気それ自体への，旧勢力との妥協にもとづく，時代逆行的対応とによるものであったことを指摘しておかねばならない。

いわば主体的かつ客観的諸条件の変化は，マルクスに新たに経済学の研究の必要を痛感させ，40年代後半期に中断していた研究を再開するにいたるだけでなく，ロンドンを中心とした国際情勢の動向への——マルクス自身の生活上の必要から生じたものであるとはいえ——ジャーナリスティックな観察を通じて，経済学研究に新たな局面を開拓するものとなったといわなければならない。この経済学研究の新たな方向づけは，マルクスの古典学派との関係を40年代に比して著じるしく進歩させるものとなった。これによって，マルクスは，40年代マルクスの市民社会把握を超克して真に

注(1)　50年代マルクスの全体像については，きわめてバランスのとれた叙述として，David. Mclellan, Karl Marx, his life and thought, London 1973, 邦訳，杉原四郎他訳『マルクス伝』ミネルヴァ書房，1976をまずあげることができる。また，山之内　靖『マルクス・エンゲルスの世界史像』未来社，1968年は，50年代のマルクスにわが国ではじめて正面からとり組んだ労作で，筆者は多くの示唆を与えられた。山之内氏は，世界史認識という課題のもとで，経済学研究に明確な意義づけをなした。最近では，宮崎犀一『マルクス』日本経済新聞社 1978年が50年代に多くのスペースをさいている。

(2)　これについては，前掲マクレラン，第5章が詳しい。

資本主義世界の総体的な認識にせまりうることとなったといってよいであろう。

40年代の中期，いわゆる『経済学・哲学手稿』や，それと同時に作成された経済学研究ノートは，マルクス自身の対象にたいする歴史的認識の限界から，対象をブルジョア社会（市民社会）として把握することには成功したが，経済学的認識の対象，歴史的に規定された法則的世界としての対象把握にはいまだ十分接近しえていなかったといわねばならないであろう。すなわち，40年代のマルクスにとって経済学は，古典学派や俗流経済学の対象とした世界を，市民社会として内実化するための一つの手段であった。そしてこの手段は，ヘーゲルの市民社会把握の根拠たる『法の哲学』の世界認識を，批判的に承け継ぐこととあいまって，40年代のマルクスの社会科学的認識方法の基軸をなしたものだといってよいであろう。

これにたいして，1850年代のマルクスにとって経済学はいかなる知的かつ実践的意義をもつものであったのか。

1859年に刊行した『経済学批判』（Zur Kritik der politiscken Ökonomie）はこの小論の対象である50年代後半期のマルクスの経済学的営為の一つの重要な帰結であるとともに，60年代の『資本論』に結実する「経済学批判体系」構築に明確な方向づけを与えるものではあったが，この『批判』の序言での周知のマルクスの知的思想的営為の自伝的総括があきらかにしているように，経済学は近代市民社会分析（解剖）の唯一の武器であった。すなわち，50年代のマルクスは，ロンドンを中心とする国際的労働者運動の前衛的地位のなかで，経済学が市民社会認識の一つの武器であることができないとの認識に到達し，同時に，新たなる理論的課題——40年代の市民社会論の内実を経済学的カテゴリーによって説明する——に，すなわちマルクスにおける理論経済学的認識の要請に自身直面せざるをえなかったのである。こうした意味で，50年代はマルクスにおける理論経済学の展開の転回期であったとみなければならない。これが57-8年の『経済学批判要綱』（Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie〔Rohentwurf〕）として具体化されることとなったのである。(3)

『要綱』は，1850年代のマルクスの経済学的営為の一つの結論であるとともに，それは，マルクスの当初からの構想の一部——具体的には「資本一般」のみを叙述としては含むにすぎないということから，のちの残された課題への出発点となるという二重の性格を有している。このような性格が，『要綱』にあって独自な意義を有している手稿「バスティアとケアリ」や「序説」の取扱いを著じるしく難渋なものとしているといってよいであろう。小論は，50年代のマルクスの全体像の一端を，これら手稿をとおして分析することによって，60年代以降をも特徴づけるにいたるマルクスの経済学批判の独自な意義を探ぐってみたいという意図をもつものである。

注(3) こうした視点から『要綱』をみるものに，Tuchscheerer, W., Bevor „Das Kapital" entstand, Berlin (Ost) 1968 がある。しかし，価値論の形成なる視点からの接近には限界がある。

2　「手稿」の構成

〔1〕手稿「バスティアとケアリ」は1857年7月に執筆されたものであること，そして，そのノートは「ノートⅢ」とされる。「ノートM」および「ノートⅠ～Ⅶ」を含くむ現行版『経済学批判要綱』に先行するものであることは，今は疑うことのできない事実である。[3a] しかし，1953年，ドイツ民主共和国ディーツ書店から刊行されたドイツ語版『要綱』はこの手稿を，『要綱』の「序説」(Einleitung) に前置していないだけでなく，この手稿をまったくの付論の地位におとしめている。結論的にいえば，ディーツ版『要綱』はせいぜいこの手稿を『要綱』本文の「資本の章」の「果実を生むものとしての資本」の系論としてしかあつかっていない。ディーツ版『要綱』の編者（マルクス＝エンゲルス＝レーニン研究所〔モスクワ〕）は，この版本への序言のなかで，『要綱』の形にまとめられる以前に刊行された手稿として，『序説』とこの手稿「バスティアとケアリ」とをあげ，後者についてただ，「バスティアとケアリにかんする小論は1857年7月『序説』にさきだって書かれたものである。この小論は，マルクスが1857年11月29日に，7冊のノートのノートⅢとしてはじめたノートの最初の7ページに見いだされる。この7ページのテキストをわれわれはこの版の巻末に入れるよう指示した」[4] とのべるにとどめている。ここではこの手稿がなぜ，巻末に置かねばならないかの説明はまったくなされていない。[5]

この点について，『要綱』本文（ノートⅠ～ノートⅦ）におけるバスティアおよびケアリへのマルクスの言及は一つの示唆を与えるかもしれない。『要綱』末尾に掲げられた「私自身のノートへの心覚え」は，ノートⅠから順にその内容の摘要を掲げているものである。ここでノートⅢの項目にマルクスはページ1～7として「バスティアとケアリ」の項目を掲げている。この「心覚え」によ

注(3a)　『要綱』を構成する手稿の編集上の区分問題については，山田鋭夫編著「コンメンタール『経済学批判要綱』」（下）日本評論社，1973年を参照。なお，ノートⅢについての言及のなかで，マルクスがバスティアよりもケアリを積極的に評価するとの見解を明確にしている。（同上，295ページ）筆者もこの見解に賛成である。

（4）K. Marx, Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie〔Roh entwurf〕1857-8, Berlin 1953, S. XIV. 邦訳，高木幸二郎監訳『経済学批判要綱』第1分冊，XVI ページ。（以下，Grundrisse と略称）

（5）1953年の Dietz 版の刊行後1968-9年にモスクワでロシア語版『マルクス・エンゲルス全集』第2版の第46巻第Ⅰ部第Ⅱ部として『要綱』が刊行されている。ここでは手稿は年代順に並べられている。ロシア語版『要綱』については山本義彦「ロシア語版『経済学批判要綱』について」(1)(2)「経済学雑誌」67巻2号，67巻3号，1972年，および同「ふたたびロシア語版『経済学批判要綱』について」(1)(2)静岡大「法学研究」を参照されたい。なお後者には『要綱』への編者注が訳出されている。

ディヴィッド・マクレラン編集の英語版『要綱』抜粋は，マクレランのすぐれたマルクス解釈を反映して，『要綱』のもつ思想史的意義をそれなりにあきらかにするものとなっている（D. Mclellan (ed.), Marx's Grundrisse, London 1971)。本書では，手稿「バスティアとケアリ」は，ディーツ版『要綱』の位置から大きく変更され，序説(Enileitung)のあとに置かれている。これは手稿の内容理解にとって大きな進歩を意味するものである。しかし，このことについてマクレランはなんら明確な言明をなしていない。ただ，マクレランは，『要綱』全体の特徴とも関連して，経済学の方法末尾のプランをあげて，これを，たんにプランとせず序説全体の意図と考える立場をあきらかにしている。このことが，とりわけ3～5の項目に関連する手稿「バスティアとケアリ」を序説につぐ位置におくことになったのではないかと思われる。（これについてはMclellan, op. cit., pp. 7～8 を参照されたい。）

るかぎり，マルクスはノートⅢの自身のページ付けに従って内容の摘要を作成していない。「ノートⅢ」は労働過程と資本の生産過程の問題を経て，生産的および不生産的労働，価値増殖過程の問題を扱い，さらに剰余価値へと展開されている。これらの内容はディーツ版『要綱』200ページから292ページにわたるのであるが，これと手稿「バスティアとケアリ」との内容的連関性はまったく存在していない。したがって，バスティアとケアリ，およびバスティアの賃金論を論じるこの7ページの手稿は，ただ「ノートⅢ」の一部を構成するがゆえにこの「心覚え」に記載されたと考えないわけにはゆかない。さらに，1859年に作成された「資本一般」の内容を伝えるプランの草案[6]は，この手稿に該当する部分の記載をまったく含んでいない。

ただ，マルクスは，上述の草案の付論のなかでバスティアの賃金制度論にふれる項目を提示している。ここでは，バスティアの賃金制度論が資本家的諸関係の無内容な把握におわっているとし，それを経済的調和論によるものと一蹴している。この記述は，『要綱』本文のうち，手稿「バスティアとケアリ」の後半部分の意図と何らかの関連性をもってなされている数少ない部分の一つであるにしても，ここから，後述のごとく，手稿の内容を類推することはとうていなしえないであろう[7]。

なお，ここで注意すべきは，『要綱』全体をつうじて，マルクスのバスティアにたいする取扱いには，プルードンをも含めて，Association の思想に対する批判が含まれていることである[8]。マルクスは，資本と労働との階級的対立を，「非本質的な，たんに形式的な形態，すなわちAsociationの形態」[9]によって階級関係が調和されているのであって，これは，直ちにAssociationそのものの批判であるわけではない。こうした観点は，おそらく『要綱』の「果実を生むものとしての資本」にも貫いて，のちの『資本論』にまでうけつがれていったものとしてよいであろう。無論その間には，マルクスの Association にかんする見方そのものに変化が生じているのであるが。

ディーツ版『要綱』における手稿「バスティアとケアリ」の取扱いは，手稿の有する独自性を十分解明する手懸りをわれわれに提供するものではない。これにたいして，1974年に刊行されたMarx/Engels Gesamtausgabe（新MEGA）は，「これによってマルクス主義経済学説の理論的な所産を再現するだけではなく，同時に『資本論』の多年にわたる生成過程を記録にとどめる」[10]という意図のもとに『資本論』およびそれの準備草稿を重要な構成部分としている。この部分は MEGA,

注(6) Grundrisse, S. 969 ff. 邦訳 V 1797ページ以下。

(7) 「1859年のプラン草案」には「賃金制度についてのバスティア」という項目がある。(Grundrisse, S. 979, V 1111ページ)

(8) 手稿の後半「XIVバスティアの賃金論」も，Association への論評を含んでいる。

(9) Gr., S. 229, 243 ページ。

(10) Marx/Engels Gesamtausgabe, Zweite Abteilung, Band 1. Text Teil 1. h ss. von Justitut für Marxismus- und Leninismus, Berlin 1976, S. 7* (以下MEGA II-1/1 と略称)。

Zweite Abteilung, "Das Kapital" und Vor, bereiten, Band 1, として，1953年東ベルリンで刊行の『要綱』を含むこととなった。しかし，この巻（Ⅱ／1）を，既刊『要綱』と比較すると，編集上の大きな特徴に気づく。まず，MEGA版『要綱』は，マルクスの主要な草稿（7冊のノート）を，それらが執筆された時間的順序で配列していることである。それに，編集者の述べるところによれば，草稿は，判読不明箇処をのぞいて，原形のまま収録されたという点である。したがって，われわれがここで問題としている手稿「バスティアとケアリ」を含む「ノートⅢ」の最初の7頁は，その表紙に記されている日付にしたがって『要綱』を構成するノートのうち最も古いものとして，巻頭に所収されるところとなった。

この点について MEGA, Ⅱ-1/1 の Apparat は，本手稿への Einleitung のなかでつぎのようにのべている。

「バスティアとケアリにかんする未完の素描は，マルクスが表紙に「ロンドン。1857年7月」と日付をしたノートのなかにある。マルクスはそこに「バスティア，経済的調和，第2版，パリ1851」と書き添えている。このことから明らかなように，マルクスはこの書物の総括的な批評を書こうと考えていた。「バスティアとケアリ」なるタイトルをかれは「私自身のノートへの覚え書」のなかでこの仕事に後から与えたのである。[11]」

この「覚え書」は，すでにみたように，ディーツ社版『要綱』の巻末に存在し，『要綱』でのマルクスの理論的営為――それらは大方モノグラフィーの形で存在するものであるが[12]――のなかに，いかなる体系的配慮が貫いていたかを如実に示すものであり，またいわゆる「資本一般」(das Kapital im allgemeine) の内容を知る重要な手懸りをなしている。この「覚え書き」は，すでに記したように『要綱』編集者によると，1859年2月頃にマルクスが書いたものだとされている。[13] したがって，手稿「バスティアとケアリ」は，1859年2月の段階でなおマルクスによって認知されていたことがわかるのだが，何ゆえ，この箇処でこの手稿がとりあげられるのか，その意図を理解する鍵は，この「覚え書き」のなかには存在していない。これについて MEGA Apparat 序言はさらにつぎのようにのべる。

「『バスティアとケアリ』のスケッチをマルクスは公刊するものとは考えていなかった。1857-8年のかれの手稿『経済学批判要綱』で，マルクスはしかし（ノートⅦの18ページで）このスケッチにふれ，そのいっそうの利用の可能性にふれてつぎのようにいう。<ここでノートⅢからバスティアとケアリの対立にかんして若干のものをとりあり上げうるであろう。[14]>」

注(11) MEAG II-1/1, (Apparat) S. 8.

(12) 『要綱』のモノグラフィーの集成としての性格については，遊部久蔵教授がしばしば指摘されていたところである。これについては，遊部久蔵『マルクス経済学』春秋社1968年での「プラン問題」への言及をみよ。

(13) Grundrisse, S. 950.

(14) MEGA, II-1/1, ap. S. 9.

ここにいう取り上げられうる「若干のもの」とは何か。「ノートⅦ」の当該箇処は，古典派の利潤率低落法則の認識について論じつつ，生産的資本が増加するにつれて利潤率が低下する傾向があるという事実を認めている論考としてバスティアとケアリとが引き合いにだされている。無論，かれらは，経済的調和論の立場から「彼らはそれを単純でまた素朴に」[15]説明する。そして階級間の調和によって，この傾向を解消してしまうのである。これについてマルクスはとくにケアリに触れ「ケアリの展開にはまだ，彼がだいたい自分で考えたように思わせるふしはないでもない。それはのちにわれわれが競争の理論で考察しなければならない一つの法則と関連している。その時になってから，われわれは彼との話し合いをつけることにしよう」[16]として，ケアリについてここで結論を出すことを留保している。また，バスティアについては，「月並みなことを逆説的に言いあらわしたり，極端な思想の貧困を形式論理でかくしたりするバスティアの平凡さならば，ここですでにかたづけることができる。」[17]として，ケアリとバスティアとを対比していることに注意しておいてよいであろう。

ケアリの提起した問題は一つは理論的には競争論で解かれる類のものであると同時に，いま一つは深く方法論にかかわる問題，すなわち，経済学的思考の質にかかわる問題でもあることが示されているのであるが，こうしたマルクス自身による示唆は手稿それ自体の取扱いにいかなる問題をもたらすこととなっているのであろうか。

手稿「バスティアとケアリ」をなす7ページにわたる論述は，その最後のページを周知の一文「こうしたナンセンスをさらに追いかけることは不可能である。だからわれわれはバスティア氏を取り上げない」(Es ist unmöglich, diesen Nonsense weiter zu verfolgen. We, therefore drop Mr. Bastiat.)[18]として，バスティアの著書『経済的調和』への批評を中止している。この一文はこの手稿の運命を決定した決定的判断とされてきたものであり，バスティアへの批評からして手稿が何ら積極的要素をもたないものとされる際の根拠とされてきたといってよい。また，このことは手稿をバスティア寄りの立場への論及と解釈し，より具体的にはそれをバスティアの賃金論への批判的論及と解釈させることになったといってよいであろう。[18a] ところが，『要綱』におけるマルクスの上述の言及からもあきらかなように，マルクスは1859年2月の段階においても，バスティアとケアリとは一つの対立として把えられるという認識を堅持していた，といえないであろうか。このことは具体的にはさきに引用した『要綱』の箇処ですでに手稿の直後に記されていたし，その考えは59年まで継続していたものとみてよいのではなかろうか。

注(15) Gr. S. 640, 邦訳 707 ページ。
(16) Gr. S. 640, 邦訳 707 ページ。
(17) a. a. O., S. 640, 邦訳 707ページ。
(18) MEGA, II-1/1, S. 15.
(18a) 手稿「バスティアとケアリ」にかんする従来の解釈は，『要綱』包括的研究として注目される Roman Rosdolsky, Zur Entstehungsgeschichte des Marxschen>Kapital<1968 でも例外ではない。例えば S. 219～220. を参照。

〔2〕MEGA II-1/1，すなわち『要綱』第1分冊の Apparat は，手稿「バスティアとケアリ」にかんして，さらにカール・カウツキー（Karl Kautzky）による本手稿の公表の経緯と性格づけとについてふれている。[19] カウツキーはドイツ社会民主党（SPD）の機関誌 „Die Neue Zeit," Jg. 22, 1903-1904 の Nr. 2.にこの手稿を「序説」の公表にひきつづき「バスティアとケアリ」なる表題のもとに公表した。MEGA 編集者は，このカウツキー編集の手稿について「この公表されたものはかなり多くの解読の誤りを含んでおり，再生されたテキストは多くの場合手書きの本文から逸脱している」[20] としている。しかしだからといって，カウツキー編の手稿が，その性質を判断するさいに一顧だに値いしないものとは思われない。われわれはここでは手稿の性質を知る手懸りとして，また，手稿そのものの歴史の一齣として，カウツキーの編集作業の意味について考察を加えておかなければならない。

「バスティアとケアリ，カール・マルクスの遺稿の一断片」と題されるこの手稿に，カウツキーは，以下のような論者の序説を付している。まず手稿の由来についてつぎのように述べる。

「ここに印刷に付された労作は一つのノートからとられたものであり，それは「1859年7月から12月」と日付があり，「経済学批判」への準備草稿の一つ，すなわち「資本にかんする章」の一部を含んでいる。」[21]

手稿の成立にかんするこのカウツキーの判断は，MEGA 編集の水準からすれば著じるしく粗雑である。まず手稿が1859年7月から12月にかけてかかれたというのは，「ノートIII」の表紙の July 1857/Nov. and Dezember 1857 とをまったく不注意に一括的に表示したものにすぎない。この点たしかにカウツキー版手稿は MEGA の言うような誤読を含むものといわねばならない。さらに，この手稿が「資本の章」の一部を含むというのは，誤解を招き易い言明である。ノートIIIはすでにみたように，「資本の章」を含むが，それは1859年の11月から12月にかけて執筆された部分である。したがって，『要綱』テキストの一部なのである。カウツキーの記述は手稿「バスティアとケアリ」までが「資本の章」の一部であるかのごとき誤解を与えるし，これは以下のカウツキーの序説の論旨ともそぐわない。

カウツキーは，まずバスティア『経済的調和』に着目して，この理念がドイツではシュルツェ＝デリッチュ（Schulze=Delitzsch）によって剽窃されたが，バスティアはケアリの『政治経済学の原理』（1837年）を剽窃した。かくて「理念の窃盗によって生産手段の私的所有が防禦された。」[22] ときめつける。問題はケアリであるが，カウツキーは，マルクスがケアリに対してなした『資本論』第

注(19) MEGA, II-1/1, Ap. S. 9.
(20) a. a. O., S. 9.
(21) Die Neue Zeit, Jg 22 Nr. 27 1904 S. 5.
(22) a. a. O., S. 6.

1部第20章「労賃の国民的相違」の批評を引き合いに出して，ケアリの思考の浅薄さを指摘する。だが，この一節は，のちにみる手稿の内容と軌を一にするものを含んでおり，マルクス自身によるケアリ評価の性格を知るうえで重要なものである。[23] カウツキーがこうした観点からケアリを問題とするのではなく，もっぱら，ドイツにおける社会主義運動の観点からみているところにこの序文の特徴をうかがうことができる。それはとりわけオイゲン・デューリング (Eugen Dühling) による「批判的社会主義」(die kritische Sozialismus) とケアリとの関連にかんしてである。これについてカウツキーはつぎのごとくのべる。

「ケアリがドイツのブルジョア経済学者にそれほど歓迎されず，むしろフランスの経済学者に共鳴を呼んだとすれば，これは，まったく主としてバスティアが自由貿易論者であり，ケアリがそれにたいして保護貿易論者であったということによる。しかもドイツではブルジョア経済学者は70年代になるまで依然として自由貿易論的であったのである。しかし，まさしく保護関税，ケアリの経済的調和における不調和なもの，外国との対立，外国との競争にたいする保護のための国家の登場こそが，デューリングがケアリを社会主義に結びつけようとする点をなしていたのである。[24]」

ここではドイツの社会主義運動においてケアリがいかなる役割を果たしたかが明確にされているだけでなく，カウツキー自身が，ドイツの経済的現実とそれへの経済学者の対応に一定の評価をもちつつ，したがってケアリにたいしてもただこれを過去のものとして除き去るだけではなく，いま少し積極的要素をみているといってよいであろう。無論それは，現実にマルクス主義（ドイツ社会民主主義）に対立するドイツにおける社会主義の情況と切り離すことはできないが，ケアリをとうして資本主義の国際的・世界市場的対立を洞察していることは，評価されてよいであろう。

総じてカウツキーによる手稿「バスティアとケアリ」の再生のこころみは，マルクスがバスティアおよびケアリに1850年代後半の新たな経済学研究の高揚のなかで与えようとした意味を根底から解明するものではないが，この手稿の公表に先立ってなした「経済学批判序説」（〔要綱〕序説）の公

注(23) カウツキーによって引用された，『資本論』第1部第20章 (MEW, Bd. 25, S, 587-8 邦訳大月版第1分冊 732～3ページ）でのマルクスのケアリ評価は，その特徴をつぎの諸点に求めることができよう。

① 労働賃金の国際的比較を「労働力の価値の大いさの変動を規定するすべての契機を考量しなければならない」(a. a. O., S. 583, 727 ページ）との視点から，労働生産性の相違にのみ求めるケアリ説の一面性を批判すること。

② ケアリが理論（古典学派）と現実との単純な一致で満足するのではなく，それの不一致に注目する点。

③ これら不一致の原因を，イギリスの世界市場への「悪魔的影響」(S. 587, 733 ページ）に求めるとともに，国家の干渉を引き出す点。

これら3点のうち，①を除いては，たんに労賃論の狭い領域に限定される以上の内容をもっているとみなければならない。それは端的に表現すれば，マルクスの「経済学批判体系」プランの，いわゆる後半の体系措定の必然性ともかかわってくるとみてよいであろう。とりわけ国家，世界市場に照明が当てられているといってよい。また，マルクスはケアリへの批判をとおして，経済理論が，対象としての資本主義的世界をその「純粋」性においてとらえるのではなく，とくに過去の経済学説——ここでは当面リカード——との関連で，それらが現実の逆をうつしだすことによってそこから純粋性から不純な要素の支配の必然であることをみている点であろう。

(24) a. a. O., S. 7.

表と同様の基本的認識のうえでなしていることをかれ自身があきらかにしている点からすれば，[25] 手稿のもつ問題の一端はやはり提示されたものとみ，これを手稿公表において意図した実践的情況認識と併せて，手稿の性格規定にさいして十分に配慮さるべき材料ではないかと思われる。

3　「手稿」の論理

MEGA II-1/1 の編者序言は，手稿「バスティアとケアリ」についてこれを「序説」と一括的に取り扱うという方向を明確にして，[26] さらに手稿についてつぎのようにのべている。

「手稿『バスティアとケアリ』は1857年に作成された，この未完のスケッチが示しているのは，マルクスがすでに当時かれのブルジョア経済学批判をどこまで進め，資本主義の経済法則の本質をどこまで認識していたかなのである。[27]」

この引用に明らかにされているように，バスティアとケアリとに対するマルクスの対応は，当時，すなわち1850年代の中期に，来るべき経済恐慌と革命の危機に主体的に対処し，それにたいする理論的準備を果たそうとする意図の，一つの帰結でもあることをわれわれは十分に留意していなければならない。いいかえれば，この時期の経済学批判は，後年『資本論』への直接の準備草稿となった1861年から63年にかけての23冊のノートとはことなって，当時まだ経済学批判体系への構想はその緒についたばかりであり，[28] いわゆるプランはマルクスが経済学批判をおし進める導きの糸の地位を与えられてはいなかったからである。いわば序説の「主張」において明示される，経済学批判のための素材への対処の方向は，この時期のマルクスの研究の一つの帰結であったからであろう。したがって，60年代のマルクス，すなわち，プランを一つの前提としてもち，[29] それによって素材と方法との一致を計り，[30] 素材の豊富化による方法の深化の途をすゝむときのマルクスとは，その様相を異にしているといわねばならない。そうした意味で一つの帰結なのである。それでは，一体マルクスはいかなる理由にもとづいて，バスティアやケアリを，イギリス古典派経済学の諸成果に先んじて批判的検討の対象としたのであろうか。これについての詮索は MEGA のなかにはもちろん見られない。また，当時エンゲルス等とのあいだに交わされた書簡にも，このことを示唆するものは見

注(25)　a. a. O., S. 7,*
(26)　MEGA, II-1/1, S. 11*
(27)　a. a. O., S. 11*
(28)　『経済学批判要綱』序説3）経済学の方法末尾でのプランの提示とその後の変遷をみればこのことはあきらかである。57-58年の草稿は，一面『資本論』準備草稿であるに相違ないが，他面，独自な意義をもっている。このことからすると MEGA のように準備草稿として『要綱』を一括することは問題解決の唯一の方法というわけではない。
(29)　M. リューベルは，Ouvres Marx II の序言においてのべているように，6部編成プランは，マルクスの生涯において変更されなかったプランであるが，それは，絶対不可侵というものではなかったことにも，注意しておかねばならない。
(30)　これについては，佐藤金三郎「経済学批判体系と資本論」「経済学雑誌」32巻6号，1961年での指摘が，導きの糸となる。

いだされていない。[31] しかし，すこしく時期をさかのぼり50年代の前半においては，マルクスは，とくにケアリにたいして，関心をもち，時々それについて言及していた。例えば1853年6月14日付，エンゲルスあて書簡において，

「アメリカの経済学者ケアリが『国内および国外の奴隷貿易』という新著を出した。「奴隷制度」というのは，ここではすべての隷属形態，賃金奴隷制，等々を意味している。彼は僕にその本を送ってよこした。そして僕をたびたび（『トリビューン』から）引用している。あるいは「最近のイギリスの一著述家」として，あるいは「『ニューヨーク・トリビューン』の通信」として。以前にも君に言ったことがあるように，この男のこれまでに出た著書のなかでは，ブルジョアジーの経済的諸基礎の「調和」が展開され，いっさいの弊害が国家の余計な干渉から導き出されていた。国家は彼のベト・ノアールだった。今度は彼は笛を別の穴から吹いている。いっさいの悪は大工業の集中作用のせいである。この集中作用はまたイギリスのせいであって，イギリスは，自分が世界の工場となって，すべての他の国々を製造工業から切り離された未開な農業に逆転させているのだ。それからまた，イギリスの罪悪については，リカードーマルサス学説に，特にリカードの地代論に，責任がある。リカードの学説にしても産業の集中にしても，それらの必然的帰結は共産主義になるだろう。そして，こんなことをいっさい避けて，集中にたいして地方分散を対抗させ，工場と農業との連合体の全国的分布を対抗させるために，最後にわがウルトラ自由貿易論者が推奨するもの，それは保護関税なのだ。[32]」

また，1852年3月5日付のワイデマイアーあて書簡では，ケアリについて，つぎのように言及されている。

「合衆国では階級闘争がはっきり目に映るところまで市民社会がなお成熟していないということを，北アメリカで唯一人の重要な経済学者である C. H. ケアリ（フィラデルフィア）が立派に証明している。彼は，ブルジョアジーの最も古典的な代表者でプロレタリアートの最も冷徹な敵であるリカードを，その著作がアナーキスト，社会主義者，ブルジョア的体制に敵対するすべての者の兵器庫となっている人物だということで攻撃しているのだ。（中略）つまり，これらのヨーロッパの経済学の輪舞を指導する人々は，相異なる諸階級の経済的基礎はそれらの諸階級のあいだに必然的で，たえず増大する敵対を生み出さざるをえないということを論証することによって，社会を引き裂き，内乱を準備しているというのである。[33]」

この二つの書簡によって，マルクスのケアリにたいする関心が，1853年以前に存在することは明らかである。事実，M. リュベルによれば，1851年には，年間をとおして14冊のノートを作成し，

注(31) 手稿「バスティアとケアリ」について直接ふれた書簡は存在しない。またこの時期までの書簡は，主としてマルクスの生活状態やイギリスの通貨問題，軍事的知識，フランスのクレディ・モビリエ関係の言及で覆われている。

(32) Marx/Engels Werke (MEW) Bd. 28, SS. 265-6 邦訳219-20 ページ。

(33) a. a. O., S. 507, 邦訳 407ページ。

そこでは，通貨問題についての文献からの抜粋がなされたという。そのなかにベイリー，ジョプリン，ロイド，ノーマン，グレイ，ヒューム，ロック等々と並んでケアリの文献がふくまれている。また文明史にかんする抜粋のなかにもケアリの名前が見られるという。[34] しかし，上に掲げた二つの引用にみられるマルクスのケアリとの関係は，50年代後半のマルクスのケアリ観を決定的に規定したものとしてよいものであると同時に，ケアリへのマルクスの関心は，経済学的な問題に限定されない巾の広さをもっている。すなわち，マルクス自身のこの段階までの市民社会観の鏡としての性格をもつ。また，経済学と関係する場合にも，比較市民社会論ともいうべき論点を含み，50年代末の経済学批判体系の構想を窺うに十分な内容的示唆を含んでいるといってよいように思われる。それは，50年代におけるマルクスの経済学研究が，大きく転回する内容を示すにいたること，少くともそのための方法の提示に重点が置かれるにいたったことを意味するものであり，それをケアリを通じて具体的に示しているとみることができる。

こうした点は，端的にいって，手稿「バスティアとケアリ」がケアリと，バスティアとで評価の基準をかなりことにしていることと合せ考えると一層鮮明に理解することができる。

マルクスがエンゲルス宛およびワィデマイアー宛書簡において，共通して指摘している点は，ケアリをとおして，資本主義の国際的対抗の意味をどう把え，それを古典派的世界像と比してどう意義づけるかにあったように思われる。たしかに，マルクスの指示するようにケアリはイギリスにみられる先進資本主義像とアメリカの資本主義像とを，両国資本主義の歴史的発展過程や段階的差異を考慮しつつ対抗させている。マルクスはそこから貿易政策上の差異に具体化されるような対抗をみるのではなく，資本主義を一つの世界的体制としてみる立場をむしろ汲みとってくる。ここにこの段階のケアリとマルクスとの大きな差異をみることができる。さらに，これは古典学派とマルクスとの差異でもある。すなわち，前者が先進国の自由貿易的政策にたいする異常な現象としてアメリカの保護主義をみ，対抗をイギリスに対するものとして，中心をあくまでイギリスにおいているのに対して，後者はこうした対抗への傾向を一つの必然性としてもつ世界体制としての資本主義をみようとする。無論そのなかにはケアリ的「対抗」を十分に考慮しつつ，いいかえれば，マルクスの視野にあるものは，イギリス対アメリカといった個別的関係ではなくまさしく世界市場である。それは，40年代に「市民社会」に収斂した世界市場ではない。そして，世界市場を古典学派の世界像がいかに内面化できるか（あるいはできないのか）をケアリをつうじて見きわめようとしているのである。この時代の古典派批判の大きな前進をマルクスのなかにみることができる。そして，こうした観点をわれわれは手稿そのもののなかにも見出すことができる。

さらに，50年代前半におけるマルクスのケアリ認識に関連していまひとつ指摘しておかねばなら

注(34) Marx-Chronik, Daten Zu Leben und Werke, Zusammengestallt von Maximilien Rubel München 1968.（以下 Rubel, Marx-Chronik）S. 68. また D. Mclellan, Karl Marx によると 1851年5月に Carey にかんする抜粋を作成している。(D. Mclellan, op. cit., p. 282 邦訳，281 ページ。)

ないことは，マルクスの国家にかんする認識である。1852年には「ルイ・ボナパルトのブリュメール18日」がかかれ，マルクスの国家観は大きな前進を遂げるのであるが，経済学にかんするかぎり，それは，まさに上述したような世界市場論への前提としての国家の把握が明確になされている点を看過してはならないであろう。ケアリがイギリス的自由貿易主義が資本の力を国家を通じてはじめて世界的なものたらしめていることに想致し，そこに保護主義を対置し国家対国家という新たな経済関係を見ようとすること，これにたいしてマルクスは大いに注目しているといってよいであろう。これは40年代のマルクスが国家を市民社会の彼岸にみていたのと対比して，国家を市民社会の現実的対抗の枠組みとしてとらえることにより，この時期の把握の仕方そのもののなかに経済学的認識の深まりを見ることのできる貴重な材料を提供するものであろう。この点もまた手稿の論点の一つを先取りするものだといってよい。

手稿「バスティアとケアリ」はまず近代の経済学の歴史の総括をもってはじまる。17世紀末のペティおよびボアギュベールをもって始まりリカードとシスモンディをもって終る経済学の歴史，すなわち経済学における古典学派と，その後の経済学の歴史とを明確に対比することをもって始まる。[35] それらは，古典学派に対して「まったく亜流的著作，複製，体裁のいっそうのつくろい，より広い素材のとりいれ，局部的強調，通俗化，概括，細目の仕上げに終始している。[36]」と特徴づけられる。無論マルクスは後年このような経済学の潮流のいわば退潮現象を経済学の俗流化として一括することとなるのであるが，ここでは，他方なお古典学派以後の素材のいっそうの豊富化という点にも着目している。たとえば，Th. トゥークなどが高く評価されることにこれは通じている。[37] これらにたいして，「ただ，アメリカ人(Yankee)ケアリとそのケアリに依存していることをみずから認めているフランス人バスティアの著作だけは例外をなしているようにみえる[38]」とする。そして両者の基本的性格をつぎのように言う。

「両人は，経済学にたいする敵対物——社会主義と共産主義——は，その理論的前提を古典学派経済学そのものの諸著作，とくにそのもっとも完成された最後の表現とみなされるべきリカードのなかに見いだしていると，把握する。だから両人は，市民社会(die bürgerliche Gesellschaft)が近代の経済学のなかに歴史的に獲得したその理論的表現を誤ちとし，これに反対するこ

注(35) 古典派経済学のうち，流通問題をあつかうトゥック(TH. Tooke)などをマルクスは評価しているが，これとの関連で当時のマルクスのトゥック評価をみるとつぎのとおりである。

「トゥックのものは，『物価史』の最後の二巻が出ている。1849年以後の分析だ。もちろん，残念なのは，『この老人が通貨論者たちやピール法にたいする休みない論戦のなかで，あまり通貨問題にばかりかかずらっているということだ。とはいえ目下のところ，やはり興味あるものではある。』(マルクスのエンゲルあて書簡1859年2月16日付，MEW, Bd. 29. S. 106, 邦訳84ページ。)なお，トゥックにたいするマルクスの同旨の論評は，1859年4月23日付エンゲルスあて書簡にもみられる。(MEW, a. a. O., S. 130, 105 ページ)マルクスはこの時期迫まりくる恐慌のなかで通貨・金融問題に大きな関心を払っている。

(36) MEGA, II-1/1, S. 3邦訳，『要綱』855 ページ。

(37) a. a. O., S. 3邦訳『要綱』855 ページ。なお，註 35)を参照のこと。

(38) MEGA, II-1/1 S. 3 邦訳『要綱』956 ページ。

と，そして古典学派が素朴にその敵対性を示したところで，生産諸関係の調和を証明することを必要だと考える。[39]」

北米人のなかで唯一の独創的経済学者[40]と評価されるケアリ，そのケアリのヨーロッパ的再版としてのバスティア，かれらの経済学はたんなる古典学派の俗流化ではないとするマルクスのこの段階での評価は十分の注意が払われるに値いする。すなわち，マルクスは，古典学派ないしイギリスにおけるその継承者たちの提示する理論的枠組のもたらすものは，せいぜい，国民経済内部における階級的対立の激化にたいする理論的隠蔽であって，イギリスと他の国民経済との対抗をその枠組みのなかにとりこもうとはしないからである。「こうしてケアリが，イギリスの経済学者たちに反対して北アメリカのブルジョア社会のより高度な内在力を主張しているのにたいして，バスティアは，フランスの社会主義者たちに反対してフランスのブルジョア社会の低い内在力を主張する。[41]」

ケアリは，北米にたいするイギリスの国家的干渉による経済的侵透にたいして，ブルジョア社会を国家から解放する必要を説きながら，自身は，結論的には保護貿易主義の立場をとるのだが，一見いわゆる経済調和論と矛盾したこのような考え方にたいして，マルクスは，「経済法則の調和は，全世界において不調和として現われ，そしてこの不調和の始まりは，合衆国のケアリ自身をも驚かしている[42]」として，それを，世界市場を構成する諸関係にかんするケアリの独自な認識として示そうとする。マルクスによれば，「ケアリにあっては，ブルジョア的生産諸関係の調和は，この関係がもっと広大な領域，すなわち世界市場で生産的諸国民の諸関係としてもっとも大規模な発展の形態をとって現われる。その場合に，この関係のもっとも完全な不調和をもって終っている。[43]」しかしこのような考え方は，「この世界市場的不調和が，経済学の諸範疇のなかに抽象的関係として固定され〔てき〕た不調和の，あるいはまだごく小規模には地方的に存在する不調和の，究極の適切な表現にすぎないということである。[44]」ここにわれわれは，マルクスが，市民社会，国家，世界市場を一つの弁証法的関係として把握するのを見る。

このように手稿「バスティアとケアリ」は，とりわけその前半部分におけるケアリへの批評をつうじて，マルクスのこの段階での経済学的世界像を提示したものといってよいであろう。すなわち，マルクスはケアリを介して，ここで自らの批判の対象たるべき古典派経済学の歴史的限界を明確にしている。このことはさらに具体的には，古典派の世界，とりわけリカード的原理の世界が，資本主義の純粋な把握にあるとすれば，現実の資本主義はむしろ不純な要素をうちに孕みつつ発展するものであり，そこからのみ資本主義の歴史が形成されることばかりでなく，そこに資本主義の内的

注(39) a. a. O., S. 4 邦訳『要綱』956 ページ。
(40) a. a. O., S. 4 邦訳『要綱』956 ページ。
(41) a. a. O., S. 7 邦訳『要綱』957 ページ。
(42) a. a. O., S. 8 邦訳『要綱』958 ページ。
(43) a. a, O.. S. 8 邦訳『要綱』958 ページ。
(44) a. a. O., S. 8 邦訳『要綱』959 ページ。

論理の弁証法的把握の根拠があること，それゆえ，こうした側面にともかくもリカード批判をスローガンとして注目しえたケアリをマルクスは，俗流経済学者として一蹴しえなかったのである。この古典派の限界をケアリは調和に対する不調和の生成と，国家による調和の回復の必要性のなかにみている。それにたいして，マルクスは，古典派経済学の限界を国民経済にたいする世界市場という19世紀資本主義の生みだした新たな対立的現実とつき合せてみようとする。ケアリの不調和も，マルクスからみれば，この世界市場が総体として示す不調和の部分的把握にすぎないものと映ってくる。

世界市場における資本主義諸国家の対抗は，マルクスの視点からすれば調和にたいする不調和による経済法則的秩序の破壊なのではない。それこそ経済法則の貫徹の姿として把えられているはずである。そうだとすれば，世界市場は，国家によって枠づけされた国民経済を論理的にまず措定しておかねばならない。これはのちの経済学批判体系プランではブルジョア社会の国家による総括として示され，いわゆる後年体系の「国家」の項目措定の骨子をなすものであった。手稿「バスティアとケアリ」はすでにこのような視点を先取りしているといえないであろうか。いわば国家→世界市場というマルクスのブルジョア社会認識の究極の課題にたいしてマルクスは，明確な方法意識をもってケアリに対処したのである。そして，ここから同時に二つの課題を，すなわちひとつは，古典派経済学や俗流経済学の歴史にたいする基本的視座を設定しえたのであり，これは，剰余価値にかんする諸学説にかんするノート以上に透徹した視点を用意しているといってよいであろう。いまひとつは世界市場を分析の核とすることによってマルクスにおける総体認識——ブルジョア社会にたいする総体認識——の方法的契機がはじめて明示されたということであろう。

4　「手稿」と「序説」——結語にかえて

マルクスが1857年7月にノートⅢの最初の7ページを「バスティアとケアリ」をもって埋めたあと，1857年8月23日には通例「ノートM」と呼ばれる『経済学批判要綱』序説（Einleitung zu den „Grundrissen der Kritik der politischen Ökonomie"）を執筆している。MEGA 編集者はここからマルクスの当時のきわめて速い執筆速度を計算しているが[45]，この「序説」によって，われわれは，1857年7月の手稿の意図したところがいっそうよく理解できるように思う。というのも，Mと記入されたノートの「A)，序説。1）生産一般」の内容は手稿での展開をよりいっそう一般化して提示することとなっているからである。「生産一般」は「当面の対象はまず物質的生産である[46]」として，社会的生産のなかにしめる個人，自然と個人との関係を中心にして従来それがいかに認識されたか

注(45)　MEGA II-1/1 Apparat. S. 16. 三宅義夫「『資本論』準備原稿についての覚え書き」「立教経済学研究」31巻1号，1977年，114ページ以下。

(46) MEGA, II-1/1, S. 21 邦訳『要綱』1ページ。

を問題とし，きわめて簡潔な経済学と社会思想の歴史を述べているからである。そこでバスティアもケアリもプルードンとともに一括されて，歴史的なものと非歴史的なものとの混同が指摘されている。過去の経済学や社会思想がいずれも生産に結集する個人を実質的に問題とせざるを得ないことから，マルクスは，この生産一般を，生産にかんするあらゆる時代に共通な規定の措定としてなそうとする。そしてつぎのようにのべる。

「要約すれば，すべての生産段階には共通な諸規定があり，それらは思惟によって一般的なものとしては固定されるのであるが，しかしいわゆるすべての生産の一般的諸条件とは，右のような抽象的諸契機にほかならないのであって，それによっては現実の歴史的な生産諸段階はどれも理解できない。[47]」

こうした生産一般の規定は，後にマルクスがこの序説を放棄することを闡明する大きな理由ともなったのあるが，しかし，それは，おそらく，当時のマルクスにとっては，これから明らかにしようとすることの先取りとして掲げたといったようなものではないであろう。それはむしろ，当時のマルクスの手元にあり，思考によって練られた結果（帰結）でなければならない。したがって，ここでの生産の一般的諸条件は，いわばブルジョア社会の総体的認識の一つの成果であって，それへの出発点をなすというようなものではなかったのである。こうしてみると，序説は，「手稿」までになされた総体的認識への基本的視座を具体的に方法としてふまえてなったものとみないわけにはゆかない。「手稿」と序説とは，いずれも，それまでの（1850年代の）マルクスの経済学的認識の重要な成果の具体的表現である。しかも，そこには50年代のみならず，60年代以降のマルクスの経済学的思惟を決定づける重要な frame work が用意されるのである。それこそが，経済学批判体系プランでなくてなんであろうか。プラン，とりわけ資本，土地所有，賃労働，国家，外国貿易，世界市場という六部門からなる壮大な構想は，50年代の経済学研究の具体的成果であると同時に，その後の展開に一貫して保持されるものであった。とりわけ，手稿「バスティアとケアリ」における国家や世界市場とのかかわりは，まさに経済学批判のありようを，それ以外にない仕方で示すこととなったといってよいだろう。*

（経済学部教授）

注(47) a. a. O., SS. 25-6, 邦訳『要綱』10ページ。

* 小稿脱稿後，山田鋭夫「マルクス『バスティアとケアリー』の世界像」「彦根論叢」第190号，1978 に接したが，論及しえなかった。他日を期したい。